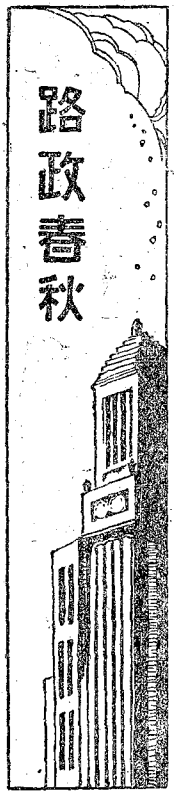

注意

本欄は讀者諸君の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻擊に渉らざる限り奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

我が邦都計の足は中支南京に伸びる

新中央政府の輝く首都たる南京にかけられたる重要課題の一つは、南京都市計畫の急速な實施であらう。昨年四月首都整備委員會が設立され、興亞院あるひは内務省專門家の手により恒久的都市計畫を着々進めてゐるが、その代表的試案によると南京城内の面積は三千九百六十二ヘクタール（およそ一千二百坪）人口包容力は百七十一萬人と算定され、都市計畫も南京城内の現狀と將來の人口膨脹率、その他交通量の增加などにもとづいて立案されてゐる。まづ第一に道路計畫であるが、交通は概ね下關より城内南部に流れる量が多いため道路計畫の重點も城内南部に置かれてゐる。

すなはち下關より城内を南部に貫く幅員四十メートルの中山北路の交通量は現在すでに飽和狀態に達しつゝあるので、これとおよそ二百メートルの間隔を距てゝ幅員二十メートルの副道を設け、中山北路と並行する鐵道線に沿うても一道路を配する必要ありとされてゐる。東西幹線は現在通り中山東路および漢中路とし、中山路北西部一帶の丘陵地は恒久住宅地域として好適であるため傾斜地に沿ひ曲線道路を配し、また地域を分つて商業地、住宅地、公共地、雜居地、工業地の五區とするほか、市民の保健北閣一圓の土地および城内清凉山、山一帶を公園とし、特に從來輕視されてゐた兒童保健增進の目的から城内數ケ所に小公園を設けんとするもので、新中央政府樹立の曉は首都としての面目を確立するうへからも、萬難を排してこの新都市計畫を遂行し、蔣介石討伐の追隨を許さぬ新生首都が實現するものと期待されてゐる。

東亞大陸は呼ぶ土木の戰士を

東亞大陸から招かれて遠征した土木の戰士（技師、技手）等は大陸の河川、港灣、道路、都市の建設事業に從事し、その中には前線將兵の守護の下に工事に從事してゐるものもあつて、作業中敵彈を受けて負傷し

たものもあり、その活躍は感謝されてゐるが、最近新たに中支から技師、技手等三十名、北支から技師以下五十名、滿洲から技師以下六十名を斡旋して貰ひたいと內務省へ依頼して來たので、人選の上、近く大陸遠征の壯途に就かせることになつたと傳へらる。

土木挺身隊を要望する大陸の土木事業を見ると、北支においては今年臨時政府建設總署の手で、昨年七月大洪水に見舞はれた天津の洪水防止對策のため白河の治水、利水工事を大々的に行ひ、白河上流の二ケ所にダムを造築する外、北京・天津・濟南・太原各都市の都市計畫事業を遂行することになつてをり、中支では上海恒產股份有限公司が黃浦江下流の市政府跡を中心に建設する新上海の工事が愈々進行することになり、一方滿洲國においても道路開設、河川改修等の事業が擴張されるので、今回の土木戰士增援依頼があつたわけである。

この外に事費約一億圓を投じて實施する北支の表玄關たる塘沽港の大改修事業は、目下設計の完成を急いでをり、來る六月頃事業着手の豫定、また青島港も青島埠頭會社の手で岸壁の大擴張と港內浚渫事業を行ひ、貨物取扱量を二倍位にしようとの計畫が決定して、內務省土木局では大陸の開發は土木事業からと意氣込んでゐる。

阿波鳴門は橋にてか
隧道にてか

德島市に達して居る國道第二十一號は、今回特殊の目的で漸次道路の改修が行はれつゝあるが、この道路は東京府を基點で阪神國道を經て明石から淡路に入り、福良を經由して撫養町に入り、德島市に達するものであるが、德島縣と淡路又淡路と兵庫縣側との二ケ所の連絡があるので、古來から不便とされて居るが、此第二十號線が重要視せらるゝに伴ふて兩海峽の隧道聯絡を技術者側において問題とされて居るが、これに就てかういはれて居る。

「四國と本土とは高松宇野聯絡であるが海上連絡であるので不便であるのは云ふ迄もない。そこで鳴門の觀潮をも取り入れて撫養町岡崎から土佐泊へ架橋し、鳴門の千疊敷下から淡路の○○先端へ架橋するのは容易である。斯くて阿淡の連絡が完成する。第二義に岩屋から明石海峽を橫斷する隧道を設けたいのである。明石海峽の海底は○○○○○○であるので可なり工事には苦心するのであらうが、海底を掘鑿中空を通ぜしむる、又は特殊の方法による埋立の上に鐵道を設くるとか、これは特別の專門家に俟つものであるが、之は見方に依ると夢を說く樣に思ふ人もあらうが、研究さるゝのは明石海峽の工事と工事費關係で、他の二ケ所の聯絡などは問題でない容易のものである。往年鳴門海峽（要塞地帶であるのは判つて居る）に架橋すると云ふ說もあつたが、今日から顧みると簡單な土木工事である此問題が先づ第一期として岡崎、

土佐泊鳴門對岸地點に架橋が出來れば陸上は「バス」電車で不自由なく岩屋から明石海峽を一時間以内の速力で聯絡するので、阿攝航路關係者にも異議はあらう。又香川縣側も意見があらうが一問題である」

慰問使か被慰問使か

或日の某新聞の或欄に、北支派遣軍の高橋たね子といふ女人が慰問使の實情と題した一文を投書して居る。其の中に「慰問使の腕章をつけて、列車の中で横柄にかまへたり、慰問先で乘用車を用意してくれの、宿のキレイな所を世話してくれの、食事がまづいのといふ話を聞きます。第一線の將兵と同一の困苦缺乏を體驗してこそ眞の慰問であると思ひますが、實際は、後方の第二線、第三線の不自由を知らぬ土地で、料理屋に招待され、酒やビールを飲んで、寧ろ戰地に來て慰問されて歸る人が多いです……、兵士の勞苦を自ら進んで體驗する心なくして、後方に於てもてはやされて、それが何の慰問ぞや……」と有る。まさかと思へど、矢張府縣費や市町村費や團體費で戰地慰問に出かける連中に斯ういつた樣な被慰問使があると見える。女ならば泣きたくなるといふ所だが、僕は泣くに泣かれず腹が立つ。と或る地方の現場青年からの一文。

衆議院で聞くべき聲かそれは

衆議院に一人の田澤なきかとの嘆聲を聞く、田澤義鋪勅選の質問に曰く、目下衆議院に於て懲罰事犯があり、政府の態度が色々傳へられてゐる。今日の事變處理は眞に官民協力擧國一致の努力によつて行はれなければならないことは申すまでもないが、眞に協力と云ふことは、その前提として各職分を尊重すると云ふことをしなければならぬと思ふ。立法府に於ては立法府の職分があり、行政府に於ては行政府の職分あると思ふ。その各自の職分が相互に十分に尊重されなければ眞の協力は出來ぬと思ふ。ところが最近新聞紙の傳へるところによれば、衆議院が決定した議員懲罰に對し、政府がこれに御干渉になるやの疑惑を抱かしめる惧れがある。例へば書記官長が政務官會議の席上に於て嚴罰を以てされたいと要望したとか、或はこれに類似するが如き新聞の記事が散見するのである。又或る新聞によると懲罰理由になつてをる議長によつて削除された部分が、學校關係その他へ配布されてをるやうなことを書いてゐる。或は嚴重な監視をしてをると云ふやうな書方もある。又今朝の新聞を見ると大きな見出しで『政府軍部共に强硬速やかに除名期待最惡の場合停會考慮』と云ふ記事がのつてをるこれらの新聞記事をながめると如何にも政府か或は政府部内の一部の人が衆議院の議員權限に對して容喙されるか、或は監督されるかと云ふ疑惑を國民に與へる惧れがありはしないかと云ふやうに心配してを

る。(後略)と之に對して

米内首相は田澤さんの御質問は洵に御尤もと思ふ。政府は帝國議會議事に關しこれに干渉するが如き考へはもつてゐない。この點誤解のないやうお願ひすると答へられた。

役人に出來るものか と親分の義俠

任俠で世を渡る街の親分埼玉縣大宮町堀ノ内前町會議員で神農及び正商兩會長の宇野儀八氏は、一月末の或日武藤大宮署長を訪れ、「木炭がなくて町の人達が困つてゐるやうですが人助けだ、炭集めを私にやらして下さい」とこの大役を買つて出た。町には一俵の炭もない時だ――トラックを秩父の山奥に飛ばしたのである。炭はうまく手に入つて、その日の夕刻滿載のトラックをピタリと大宮署前に横づけた。炭飢饉の町では大喜び翌日出征軍人遺家族を優先的に、他は調査に基く配給券持參者に配給したのであつた。

〃縣では役人が炭の山出しに躍起となつてゐるが、一俵も來ないではないか、親分は親分だけある〃

又、

〃昭和の今日物資はまさに封建的だ、この經濟封建時代に俠客が飛び出すとは面白い――〃

これはその時の町の人達の歡聲と批評の聲だつた。

この宇野氏の任俠に共鳴した秩父のさる寺の住職が、

「俺にも一と肌脱がしてくれ」

と寺の山林を宇野氏のために提供、坊さんと俠人の合作でその山に四つ五つの製炭窯が築かれ、煙を吐くことになつた。宇野氏の話に、

「要するに熱が足りないんだ。お役人の仕事には無理だらう。商人も猾すぎるから山元で出さないのだ。僕が炭を持つて來たら町の木炭商が悲鳴をあげてやめてくれと申込んで來たが、乘出した船だ。今更後へ退けるものかね」

と勇氣當るべからざるものがある。なほ宇野氏の製炭計畫では原木、燒夫、菰繩代及び山出し、受驗料まで入れて檜荒十五キロ一俵一圓七十三錢で十分出來るといふ計算ださうである。

あるかなきかの珍聞奇譚 (80)

○稀に見る頭大の隕石　高知縣長岡郡高須村農會長松村猿馬氏は、多忙な公職の餘暇縣下各地を跋渉傳說史跡の研究に餘念がないが、去る二月十九日自宅附近の盛土の中から目方一貫五百餘匁に達する稀代の隕石を發掘、縣下學界の鑑定を求めてゐるが同氏に刺を通ずれば、「私の部落大島部落は古代から種々傳說に富んでゐるが、昆沙門天として氏子が崇敬してゐた神社の跡地から發掘したもので、古來この隕石を神體として祀つてゐたらしく明治初年社殿を他に

移轉した際神體としてあつたものが今まで埋沒してゐたものでせう」學界權威者の鑑定によると目方一貫五百匁もある隕石は全國的に稀であるといはれてゐる。

○石器時代の遺跡から提瓶　香川縣史蹟調査委員高松高商教授寺田貞次氏は、縣史編纂委員松浦正一氏と〻に十八日木田郡前田村大字東前田字東畑の横谷池の西南堤防下に約六十年前發見された遺物が埋藏されてゐるといふ噂に試掘したところ、果して發見された。

高さ二十六センチの提瓶、破損した蓋附平坏、鐵鏃小片五箇と硝子製と思はれる帶紫青色の白玉三箇である。今回發見した遺物出土地も古墳地に相違なく、確實に石室墳でその兩壁であつたと思はれる安山岩質石塊が殘されてゐるのでわかるといはれて居る。

○勤王史家飯田忠彦自筆の『野史』　德山の生んだ勤皇史家飯田忠彦の自筆の野史淨書本が最近縣史編纂所主任委員小川山高教授によつて發見された。この野史といふのは忠彦が實に三十有餘年の歳月を費し獨力心血を注いで完成した國史で、大日本史に後續するもので、後小松天皇から仁孝天皇までを記した大著述であるが、その自筆淨書本はいままでどこにもないものとされてゐた所、今回縣史編纂資料を蒐集中、德山市毛利子爵家書庫から發見された頗る貴重なものである。

○珊瑚岩に古錢　臺灣島高雄市の田村寅吉所有貝取り船がパラセル島附近で採貝中珊瑚岩につゝまれた支那元および明時代の古錢の塊りを引揚げてきた、海賊船が支那漁民の戎克かそれとも倭寇で鳴らした八幡船かも知れない。とにかく今から五百年ほど前すなはち支那の年代でいへば、明の太祖から成祖時代に何隻かの船が支那大陸の南端パラセル群島附近に沈んでゐるに違ひない。これらの船の貨幣や陶器類などが五百年もの間歴史と物語とを祕めて靜かに海中に横はつてゐるのだこれらが今日たまたま出漁中の漁船に發見された、このたび成田丸が持歸つたものは

至道元寶△武通寶△永樂通寶△宗寧元寶

などで束ねられたまゝ珊瑚礁に着いてゐる

この大きさは人の頭大で約二貫匁くらゐ、蒼色に錆を吹いてゐながらも貨幣に刻まれた文字ははつきりと讀まれ、いにしへの匂ひをたゞよはせてゐる。

田村氏の話によればパラセル近海にかうした貨幣や陶器の化石化したものがあることは十年ほど前から分つてゐました。やはりここの高雄から行つた漁船が發見したものです。相當大量にかたまつてゐるといふので三、四年前にある漁船はダイナマイトでこわして澤山持つて來たこともありましたが、世間では大した話題にもならなかつたやうです。